

# 民衆のコミュニケーションにおける「変化」の意味 ーフィリピン・西ネグロス州の草の根宗教行事の事例からー

平井 朗

フェリス女学院大学大学院博士後期課程  
映像プロデューサー、環境 NGO ラムサールセンター専門家

## 1. はじめに

筆者は別稿<sup>1</sup>において、フィリピン西ネグロス州ラカルロータ市バランガイ・ラグランハを中心とする、セント・ヴィンセント・フェレール・パリッシュ（SVF Parish＝小教区<sup>2</sup>）で毎年聖週間<sup>3</sup>に行なわれているキリスト受難劇「カルバリヨ」を通して、そこに成立したコミュニケーションは一体何で、それらは暴力と平和にどのように関連したかを明らかにしようとした。その結果、筆者の提案する脱開発コミュニケーションという考え方による事例分析によって**コミュニケーション**が暴力の克服にどうつながるかをある程度明らかにできたが、カルバリヨの実行委員会などの教会組織、青年組織、それに携わる人びとの内部にどのような暴力が働いているのかの分析はまだ課題として残っていた。

カルバリヨによって暴力を認識する**コミュニケーション**（「意識化<sup>4</sup>」の過程）が行なわれ、その認識を共有し外部にひろめ共闘を募る**コミュニケーション**が行なわれた。その意味でカルバリヨを行なうことは脱開発コミュニケーションの過程であったといえるにもかかわらず、現実には開発主義が克服されるどころか、前記別稿で指摘したようにカルバリヨは変質を指摘される状況にある。これは保守的な権力者やそれらに結びつこうとする勢力との政治的力学の中に起こったことなのか、ラグランハのエクスパーリャ（調査）サイトの人びとや、草の根運動の指導者の中にもともと開発主義が内在しているためなのか、あるいは被抑圧者と指導者の対話によってすすめられるとされる意識化が実は成り立っていなかったのか、そこにさまざまな要因が考えられる。

したがって本稿では、ラグランハでの新たなエクスポージャーとともに、バコロド市の都市低所得者集住地域での BCC<sup>5</sup>の活動事例との比較検討などから、青年層の自律的表現運動として始まったカルバリヨがその後実際に変化（変質）したのか、変化したとすればそれはどのような変化であったかを分析し、民衆による草の根宗教ネットワーク運動の課題と意識化の可能性を検証してゆく。

## 2. ラグランハとカメロリの BCC 活動

本章では、2004 年 11 月に行なったエクスポージャーなどを通して得られた 2 ヶ所の BCC 活動の相違点、共通点などの分析を通して、民衆の中での BCC のとらえられ方や、その活動にかかる司祭と民衆の関係性が、この 10 年間にどのような変化をしたのかを検証する。

### カメロリと BCC～TALTAL

カメロリは西ネグロス州の州都バコロド市の海岸地帯に位置するバラングアイ 35 をカバーする Chaplaincy<sup>6</sup>である。4000 軒以上の家があり、人口は 1 万 5000 人～2 万人ほど。もともとは海岸の無人地帯（政府所有地）であったが、バコロド市がこの地域をダンプサイト（ごみ処分場）としたため、金になる廃品を回収しようとする人びとが 1960 年代初頭から移住してきて住みつくようになった。8～9 割の住民に定職が無く、仕事もほとんどがトライシカド（輪タク）運転手などインフォーマル・セクターのものである。

ダンプサイトでは蠅蚊が多く、住民の中で皮膚病が激増したため始まった *Bayanihan*（伝統的互助）は 1 家族あたり 63 m<sup>2</sup>（7m×9m）の居住権獲得をめざすなど *Alay Kapwa*（共に助け合う）運動に発展した。1975 年に *Alay Kapwa* のセミナーが行なわれたように、未だ常任の司祭がいなかった 70 年代のカメロリだが BCC が組織され、教育や *Panimbahon*<sup>7</sup>、社会問題に取り組むようになった。Squatters<sup>8</sup>と呼ばれ、都市貧困層<sup>9</sup>と位置づけられるカメロリ BCC の人びとは、かつて何度も直面した立ち退きへの反対運動とともに州内の peasant（小農、農業労働者）との連帯を推進、1985 年 9 月の The

Escalante Massacre (エスカランテ虐殺事件) は今も記憶に新しいという<sup>10</sup>。

一方、文化活動を通しての青年教育として、毎年聖週間の Good Friday にはラグランハと同様に *Pasyon*(キリスト受難の叙事詩)に基づく *Mini Taltal*<sup>11</sup> が行なわれる。バランガイ内 14ヶ所を移動してパシヨンの劇・歌・踊りが青年たちによって披露される。そこではキリストの故事が演じられるだけでなく、現在の人びとの苦しい生活の現実の contextualization がナレーションされる<sup>12</sup>。

### ラグランハと BCC～カルバリヨ

パニンバホンは 1966 年から、コロンバン会<sup>13</sup>のニアール・C・オブライエン神父<sup>14</sup>によって始められ、西ネグロスに広められた<sup>15</sup>。パウロ 6 世の回勅『ポプロールム・プログレシオ (諸国民の進歩推進について)』が公布された 1967 年、バコロド教区ではアントニオ・Y・フォルティッチ (Antonio Yapstco Fortich) 司教が叙階された。

教区ミーティングにおいて社会行動委員会 (Social Action Committee = SAC) が設置され、1969 年に司教はサトウキビ農園で働くサカダ (*sacada*<sup>16</sup>) の苦境に言及した司教教書を発行し、社会正義実現に強い意志を示した。SAC はネグロス砂糖労働者同盟 (Negros Federation Sugar Workers = NFSW) 等、貧困者・小農の組織化を支援したため、大地主らは司教を「共産主義者」として敵対した。1975 年に *Alay Kapwa* が、1977 年に BCC が教区の正式なプログラムになり、人びとの信仰と社会正義を結びつけるものとされた<sup>17</sup>。

バコロド教区で 9 人の BCC 活動家が次々と行方不明となり、虐殺死体となって発見された 1980 年、ラグランハの SVF Parish (その当時は Chaplaincy<sup>18</sup>) にヴィック・ドゥマラオス (Victor Dumalos) 神父が着任した。

ヴィック神父は、ラテン語で行なわれていたミサをイロンゴ語で行なうよう改めたほか、周辺のアシェンダで暮す人びとの組織化を進めた。そのために利用できると考えられたのが、1986 年からナガシ (Ngasi) というアシェンダの青年たちによって自主的に始められた *Taltal*<sup>19</sup>であった。1988 年 *Taltal* はラグランハに移されて SVF 全体の行事となった。1982～85 年にカ

メロリの Chaplaincy であったテレンス・ヌエヴァ (Terrence Nueva) 神父が 1990 年にラグランハに着任した後、*Taltal* は contextualization の手法を取り入れたカルバリヨ (Kalbaryo) とされ、規模も拡大した<sup>20</sup>。

### カメロリとラグランハを比較する

バコロド教区の中でも特にこの 2 ヶ所を選んでエクスポージャーを行ってきたのは、カルバリヨのようなコミュニケーション活動が積極的に行なわれていること、突き詰めれば「BCC 活動が活発である」という、BCC 前総主事ロメオ・エンペスタン神父 (筆者らをバコロド教区に受け入れてくれている) らの推薦によるところが大きい。その意味でこの 2 つの地域にはさまざまな共通点がある。

先述のように、ラグランハで 1980~90 年に民衆の組織化を積極的に進めたヴィック神父の後、1990~98 年を担ったテレンス神父は、1982~85 年にカメロリで人びとの闘いと共にいた。また 1994~2002 年のカメロリ Chaplaincy はエンペスタン神父その人であった。カメロリ BCC の青年リーダーの一人によれば「エンペスタン神父やテレンス神父から多くのことや責務を学び、モチベートされた<sup>21</sup>」という。ラグランハの古くからの信徒たちは今も何かにつけて (現司祭でなく) オーストラリア在住のテレンス神父に相談を持ちかけている。

カルバリヨのような大掛かりな宗教行事が盛大に行なわれるラグランハ。2003 年からわずか 1 年 8 ヶ月で立派なチャペルを建て替えたカメロリのように確かにこの 2 ヶ所では地域の人びとの教会への動員は非常にうまくいっているように見える。しかし、「民衆」と「指導者」の対話から得られる「意識化」による、変革に向けた地域の人びとの自律的運動が今活発に行なわれているかと問われれば、たとえば以下の観察から両地域とも否定的に答えざるを得ない現状である。

- (a) 両地域とも一部の高齢者 (古くからの活動家) は「BCC は今も活発だ」と主張するが、多くの人びと特に青年層は否定的、もしくは BCC の活動に関心がない。
- (b) ラグランハでは以前行なわれていたパニンバホンや、BCC の保健プ

プログラムは行なわれておらず、オルガナイザーが来ないので特段の青年活動も無い。遠隔地であるユボ (Barangay Yubo) では月 1 回ミサが行なわれる。以前は司祭が当地に宿泊して人びとと語り合ったり、さらに山を歩いて登ったバイス (Sitio Bais) でもミサが行なわれたが、現在そのようなことはまったくない<sup>22</sup>。

- (c) カメロリでは今も 5 つの地域で週 1 回パニンバホンが行なわれている。しかし参加者の多くが高齢者で、日常の青年活動はほとんど行なわれていない<sup>23</sup>。
- (d) ラグランハでは 1998 年にテレンス神父が異動して以来、Parish 司祭が長続きせず次々と交代している。1998～99 年に Vergilio Mahinay 神父、2000～2001 年に Henryck Villanueva 神父、2002～2003 年に Jesmar Manato 神父、2003 年～現在は Ernie A. Larida 神父と、実質的に数ヶ月～長くて 2 年程度での異動という異例の事態である。ちなみにカメロリでもエンペスタン神父の後任の Joyhimela 神父は 1 年で異動し、2003 年から Chaplaincy となったのは、かつて SVF を数ヶ月で去った Mahinay 神父である。

### BCC 活動の現状

Squatters と呼ばれ、常に強制立ち退きの危機と背中合わせに生きてきたカメロリの人びとは、力を合わせて (文字通り) 自分たちのコミュニティを守らなければ生きてゆけなかった。その住民にとって最重要の課題で、自分たちを教育し、自分たちの権利を知らせてくれたのが BCC であり教会だと考えられている。

現在でも立ち退きの危機が消滅した訳ではないが、Gaisano City Shopping Mall 建設において話し合いで 300 家族が再定住地に移転する解決を見いだしたように、いまや直接的暴力が差し迫る緊迫感は薄れている。それにもなって人びとの日常的な危機意識～参加する街頭行動のテーマも次第に「値上げ反対」などの経済問題にフォーカスするようになっている。最近のラリーは主に(1)小農との連帯、(2)汚職反対、(3)立ち退き反対、などについて行なわれており、筆者がインタビューした人びと全員が問題の解決は

容易ではないとの認識を示した。

筆者が1泊させて貰い、パニンバホンが行なわれたエリア・リーダーのサニシット夫妻 (Mr. and Mrs. Oscar Sanisit) の家では妻はバランガイ・オフィス職員、夫は町工場の工員だが、カレッジ2年生の娘(18)とハイスクール3年生の娘(15)、小学1年生の養子の息子(8)がいるため子どもの学費の工面に苦労している。政府のセミナーに参加して養豚技術を学び、裏庭で豚を12頭肥育するが、半年かけて1頭当たり500ペソほどの利益にしかならず生活は苦しい。貧困が最大の問題で、解決するには養豚を続け、働き続けるしかないと考えている。それでも値上げ反対など、BCCの街頭でのさまざまな活動には参加している。はっきり言ってそれで問題が解決するとは思っていないが、それでも参加するモチベーションは、いつの日か変革はできるという遠い希望だけであるという<sup>24</sup>。

やはりパニンバホンが行なわれたエリア・リーダーのアポロジスタ夫妻 (Mr. George and Mrs. Mercy Apologista) の場合、夫は建設作業員で東部ビサヤに出稼ぎ中、妻はサリサリストアなどを営んでいるが子どもが10人いるので学費を稼ぐのが問題である。特にカレッジの学費が高く、2番目の子(息子)、4番目(娘)、5番目(娘)が在籍しているが学費が払えず休学中である。解決策は助け合って生きていくことであると考えている。BCCに参加するのは、神を信じ、他のメンバーを信じているからだ。問題をお互いにシェアし助け合える。世界を変えられると信じていれば、社会を変えることができると信じている<sup>25</sup>。

このアポロジスタさんの場合、ハイスクールと小学校に通う子どもはフタバカイ (Futabakai) という日本人のシスターTomiyamaがネグロスで始めた奨学金を貰っている。フタバカイはカメロリでは12人の小学生・ハイスクール生を支援しており、カメロリのチェアマンはBCCエリアコーディネーターのナナイ・ピナン<sup>26</sup>である。ナナイ・ピナンや前出サニシットさんのインタビューで明らかになったのは、当地のBCCで積極的に活動に参加している人びとは皆、自分の子どもがフタバカイの支援を受けた経験があるということである。BCCで熱心に活動すればフタバカイの支援が受けられるというオルグも行なっているとのことで、フタバカイがBCC活動参加の一

つの動機づけ、もしくはインセンティブになっている。

一方、カメロリ BCC を長年指導してきたエンペスタン神父の異動によって、地域内の政治的な力関係の変化が表面化してきている部分もある。現在教会の司牧委員会の一部は BCC 活動に賛成しないので、BCC 志向の信徒と、教会の組織 (mandated organization) が対立している。今や BCC はカメロリ信徒の中では少数派になっており、活動資金を教会に頼らず自力で集めている状態である。現在のマヒナイ神父はチャペル建設のため富裕層からの募金に力を発揮したが、信徒内の対立はコントロールできず、進歩派・保守派・中間派のバランスの上に乗っている状態である<sup>27</sup>。

ラグランハ (SVF) では、司祭の役割の大きさを強調する意見が聞かれた。トグレ夫妻 (Mr. Leonardo Togle、78 歳、 Mrs. Prescila Togle、78 歳) は、政治的な困難や PC (パトロン・クライアント) 関係<sup>28</sup>の中で、人びとと司祭が離れているとコミュニティに問題が起こるので、司祭の役割は大きいと言う<sup>29</sup>。ナナイ・ロリータ (Mrs. Lolita Ringor、61 歳) は未亡人、失業中の息子を抱えて日常の食糧を得るにも相当苦勞している。神に祈る以外の解決策を知らないという彼女は、教会のリーダーに異なった階層の人が混じっていると、それぞれが人びとから離れて自派への囲い込みを行ない、対立が起こるので司牧者が仲介する必要があると考えている<sup>30</sup>。

小さなサリサリストアを営むナナイ・ドローレス (Mrs. Dolores Lumaawag、41 歳) はマニラでの家事労働の仕事がなくなり戻ったが、次男はカレッジ学費が払えず休学中である。彼女によれば、問題は司祭にあるのではなく人びとの中にある。寄り合いを開こうとしても人が集まらない。人びとがただ食うことに忙し過ぎる。周りに 1 日 1、2 回しか食事できない人がたくさんいる。祈りだけでは食えない。BGA (バランゴン生産者協会<sup>31</sup>) のバナナ生産が盛り上がっていた時は、人びとが BCC の活動にも協力したが、バナナ生産の縮小とともに活動も下火になった。またこの活動を通してマニラで働く機会を見つけた人も多い<sup>32</sup>。

BCC の積極的な活動家でコミュニティ・スクール<sup>33</sup>やフタバカイの責任者であったナナイ・ミライ (通称 Nanay Miray、Mrs. Dida Labina、42 歳) は

BCC 活動が不活発になったのはすべて現在の司祭の責任であると言う。以前はリーダーを地域から選挙で選んでいたのに、現在の司牧委員会の中の BCC オフィサーは司祭が独断で任命した人物である。司祭はコミュニティ・スクールのディレクターであるのに予算を配分せずに放置していて、教員の給料も払えない。教会は新しい建物を建て、権力者やお金持ちを集め、お金を集める場所になったので彼女はもう行きたくないのだ<sup>34</sup>。

テレンス神父の秘書だったジンキー (Mrs. Jinky Seloterio) も同様の見方をしている。司祭の志向が poor でなく rich になり、人びとが集うことでなくお金を集めることになったため、パニンバホンはなくなり、助け合いもなくなって、BCC は名前だけで実態が存在しなくなった。献金を最低 20 ペソと決められたら誰も教会に行けない。バナナ栽培が下火になって以降確かに BCC は低調だが、そも司祭の志向 (orientation) が違うのだという<sup>35</sup>。

### 事例とその背景のまとめ

ここまで、ラグランハのカルバリヨは脱開発コミュニケーションの過程であつたにもかかわらずそれが変質したと言われ、BCC (草の根宗教民衆運動) 後退がその背景であるというのは事実なのかどうかを現実の中に見てきた。またその原因をラグランハとカメロリの事例の中から、運動そのものと運動を担う人びとに内在するものを中心に探ってきた。

以上をまとめるとまず、かつてマルコス政権の戒厳令及び軍隊の暴圧によって組合も集会もデモも違法とされた中で、貧困層の民衆にとって、第 2 バチカン公会議以降の Church of Poor—BCC は唯一の結集軸であつた。しかし(1)1986 年のマルコス政権崩壊以降 (特に 90 年代以降) の軍隊による直接的暴力的抑圧の漸減、(2)1992 年の共産党 (CPP) 分裂<sup>36</sup>にともなう左翼勢力の分裂・弱体化を背景として、教会組織内部でのモチベーションの低下、組織の分裂もしくは有名無実化といった事態が起こっている。

民衆にとって差し迫った暴力に対抗して団結する必要が薄らいだ一方で経済格差はますます拡大し、貧困層は出稼ぎに行く以外に生きる方法がなく、特に青年層の流出は激しい。毎年ラグランハを訪れる度に顔馴染みのコミュニティ・スクール教員やユース・グループの青年たちが姿を消して



いるので、組織や運動を新しい世代に継承してゆくことが最早物理的に困難な状態にまで至っている。しかもエリアリーダーやコーディネーターに比較的多い（その地域の中で比較すれば）「中間層」の人びとの生活は 80 年代と比べると（「電気が来たし」というレベルではあるが）モノが増えており、その生活レベルを維持し上げるための海外出稼ぎがますます一般化した。結局のところ、かつての皆貧しいけれど食べ物を分け合い、団結して暴力に立ち向かった暮らしから、携帯電話があっても寄り合いに人が集まらず、葬式ですら人が少なく神父も来ないことの多い「人びとが冷たくなった（ジンキー談）」生活に変化したのである。もちろん一方で彼ら信徒が主張するように、BCC 活動が盛んになるか低迷するかが、司祭個人の志向にある程度属人的であることを否定はできない。とはいえ信徒が一方向的に耐えてきた訳ではなかったであろうことは、1998 年以降、司祭が短期間に何度も変るような事態が起きたことから容易に想像できる。

バコロドのセント・ラ・サール大学社会研究開発センター (ISRAD) 所長のヴィオレータ・ゴンサガ博士 (Dr. Violeta Gonzaga) は 1991 年 (フォルティッチ司教引退のわずか 2 年後) 既に「1980 年代中期のネグロスであればほど蔓延った飢餓と窮乏は最早どこにも見られない。・・・ (中略) ・・・ 経済成長は貧困層の社会動員力を奪ってきた。経済的生き残りに熱中することで、貧しいネグロス人は好戦的な軍隊と闘うことはもちろん、社会的異議申し立てをますます厭うようになっている<sup>37)</sup>」と述べる。一方で「教会は人権尊重、真正農地改革、農地紛争の積極的非暴力解決を唱道し続けなければならない。なぜなら保守政治家や政治的『名門』復活の兆しがあるからだ」と、教会が政治において活発な役割を担うことで、民衆、特に貧困層をパトロン政治 (PC 関係) からの引き離しを先導する必要があるとしている。それから十数年、今や BCC 停滞の一方で教会と民衆の間の PC 関係復活すら懸念せねばならない時代に入っているのではないだろうか。

### 「自分の中に敵がいる」

日本ネグロスキャンペーン委員会 (JCNC) ネグロス駐在員の大橋成子氏が、農地改革で土地を手に入れて組織された生産者協会農民の寄り合いで

の話レポートしている。「地主がいた時は団結できた。敵がはっきりしていた」「同じ低賃金で苦勞している時は、仲間意識も強かったけど、土地闘争が終わって、これから皆でこの地域を發展させよう、という時になるとなぜそっぽをむくんだ」「昔、敵は外にいた。軍隊も地主も顔の見える敵だった。でも今、おれたちの敵は自分自身の中にあると思う」「農園の監督官の指令で働いたり、リーダーの指導で労働運動していた時代は終わったんだ。外の敵を批判してストに入ると、自分の中に敵がいる闘いは全然違う」<sup>38</sup>。

一方の民衆は既に、新しい闘いを模索しているのだ。

### 3. 「意識化」は成り立つのか？

本稿の初めに言及した拙稿<sup>39</sup>では、脱開發コミュニケーションにおいて「意識化」の過程を構造的暴力克服の手段とするものであるとした。しかしかつて BCC 運動の中で解放の神学と並んで金科玉条の如く語られた「意識化」が、ネグロスのコンテクストにおいて本当に脱開發コミュニケーションを成り立たせるのかを本章で検討する。

#### フィリピン史におけるカトリック教会の二重の機能

フィリピンの教会と「意識化」について語るには、まずその植民地化におけるカトリック教会の役割について再確認する必要がある。当然のことながらスペインによるフィリピンの植民地支配は、カトリック教会の「宣教の任務<sup>40</sup>」と結びつけられて正当化された。

しかし一方レイナルド・イレト (Reynaldo C. Ileto) は、フィリピンの民衆史において、土着化したキリストの受難叙事詩「パシオン」が植民地支配への抵抗の原動力と解放のビジョンを与えたことを明らかにしている<sup>41</sup>。

宣教師たちが救いを分りやすく伝えようとして「パシオン」を演劇化した「セナクロ (脚注3参照)」を通じて「救いへの道は地上の苦しみを忍び、権力者に対して従順になることである」と教えたにもかかわらず、民衆は逆にパシオンによって自らがおかれた政治的・社会的状況を理解し、「支

配者に対する抵抗運動を単発的で地域的にとどまるようなものから、キリスト教の中心教義に基づいた普遍的歴史観をもった解放の闘いへと展開させられるようになった<sup>42</sup>」。

パシオンはフィリピン革命期、労働者階級出身のアンドレス・ボニファシオらの秘密結社カティプナン（KATIPUNAN、1896年）に解放のビジョンを与え、カティプナンは後のフィリピン旧共産党 PKP と民衆ゲリラ組織フクバラハップ（抗日人民軍）にまでつながっている<sup>43</sup>。フィリピンの教会と民衆、そして革命党とのアンビバレントな関係は「パシオン」に端を発しているのである。

### フィリピン・カトリック教会と民衆運動

東京基督教大学の宮脇聡史は、「公共宗教」としての現代フィリピン・カトリック教会の社会観と社会関与のあり方を、教会（フィリピン・カトリック司教協議会、CBCP）の司牧書簡から分析している。BCC などに対する教会自身の側の考え方がうかがえるのは以下のような部分である。

#### (a) フィリピン社会の像

「未熟なキリスト教国」（シン枢機卿）

「二段重ねのキリスト教」—土着信仰・世界観・規範と、キリスト教信仰・世界観・規範が二段重ねになっている。

スペイン植民地時代がフィリピン・キリスト教の黄金時代

#### (b) 社会における教会像

「貧しい者の教会」—教会は代表者、道徳的指導者として発言権を持つ<sup>44</sup>。

レイナルド・イレトやルーベン・アビトラと「二重性」認識に関しては同じでも解釈は 180 度逆である。土着信仰と影響を受け合うことによってパシオンが解放のビジョンを指し示すようになったという歴史認識を、教会は「未熟」の一言で切り捨てる。植民地時代の社会には「進行的な過程を中核に、村落共同体内でもキリスト教的なライフスタイルが充満していた<sup>45</sup>」という訳だが、そのような変化（世俗化）に対する教会の責任や、植民地遺制に対する反省は表明されない。

「貧しい者の教会」（「貧しい者の『ための』教会」ではない）は「未熟な信徒がいて、司教や司祭の教導権が不可欠な方が教会にとっては正当性を保ちうる<sup>46</sup>」のだ。

この論文の結論としてさらに宮脇が挙げた、制度的教会の機能不全の背景とは「教会の強い圧力団体的な政治性、名士の性格、不明朗な富などを維持したままでの『貧しい者の教会』概念導入という矛盾<sup>47</sup>」である。これらはフィリピンの現場で教会を観察している限りではまったく正しく見える。たとえばある地域の司祭が、キリスト受難劇のテーマを「クリスチャン家族再生の種」であるとし、小教区の全権限を信徒から自らに移して直接コントロールしているのは、CBCPの方針を忠実な施行ともいえるのである。

### フレイレ「意識化」の限界と「意識化」への疑問

ここまでの論考においても、このように非対称的な権力関係が内在するフィリピンの民衆と教会の間において、「水平方向の対話による意識化」が本当に可能なのか相当に疑問であるが、ここではフレイレの論そのものの内包する問題をいくつか指摘する。

フレイレは教師＝生徒、教師たち＝生徒たち、指導者＝被抑圧者の間の対話とその弁証法的発展が行なわれ、あるいは「現実を知り明らかにしようとする実践と、現実を変革しようとする実践…二つの別々の実践が、ダイナミックで弁証法的な形で結びついた時、真の意識化が行なわれる<sup>48</sup>」と言い、二つの主体の関係性については多弁であるが、「指導者」の条件や性格については僅か<sup>49</sup>しか述べていない。

民衆が民主的な教育の礎であって、民衆こそが変革の担い手である考え方は一見、まさに民衆の自力更生を推進する方法であるかのように思える。しかし、まず「教師」あるいは「指導者」（はたまた「革命党」）とは誰なのか？フレイレは指導者は「民衆とともに言葉を語らねばならない<sup>50</sup>」と対話によって指導者のセクト主義を防ぎ、民衆の操作でなく組織化を行なうとする。しかしフレイレ理論が「上からの要請による識字術獲得のキャンペーンで利用されると、フレイレが否定するはずの、単なる読み書き技術としての識字術に成り下がってしまう」ように「いかに個人の＜意識化

>を目指したものであっても、結局個人を犠牲にした集団の利益へと導くものに利用される余地を残している」と菊池久一は指摘<sup>51</sup>する。「指導者」「民衆」を所与の集団としてしまうことで、結果的に民衆が指導者のドグマや利益への奉仕に利用され、意識化が成り立たない場合があるのだ。

さらに、民衆が意識化して一体誰に、何者になるのか？という疑問がある。フレイレは、中心社会に依存して社会が近代化するのでなく自律的であることが「発展」である<sup>52</sup>という従属論の立場をとっている。一方民衆の「人間化」が「かれらがみずからの進歩の主体となれるよう、そのための手段を与える<sup>53</sup>」ことならば、その「進歩」とは何なのか。「進歩」によって人びとが「近代的主体」になるのならば、そこには開発主義の入り込む余地が十分にあり、被抑圧者が「個人」の責任によって開発の主体や客体へと変化することも起こり得るのである。

#### 4. おわりに

本稿では、フィリピン・西ネグロス州民衆の草の根宗教ネットワークであり、解放のための運動ともいわれる BCC の活動事例から、そこに脱開発コミュニケーションを成立させるカギと思われた意識化の可能性を探った。

その結果、BCC 活動が停滞してきたといわれる兆候の確認と、その概ねの原因は明らかになった。しかし一方で、脱開発コミュニケーションの重要な要素と考えていた「意識化」の過程の困難さだけでなく、その概念そのものに対する疑問も浮かび上がった。筆者はここで自力更生を行なう者同士の連帯を通しての「意識化」を提起したいが、今回は既に紙幅が尽きたので、この点はさらに今後の課題としたい。

---

<sup>1</sup> 拙稿「脱開発コミュニケーション～西ネグロス州ラグランハにおけるカルバリヨを通して～」([http://home.att.ne.jp/wood/akira/hirai\\_ronbun\\_Philiken04.htm](http://home.att.ne.jp/wood/akira/hirai_ronbun_Philiken04.htm)、2005年2月20日アクセス) 脱開発コミュニケーションについては、こちらを参照。

<sup>2</sup> 日本のカトリック教会で教区と呼ばれる Diocese (Bishop=司教が管轄する) の下位に小教区(教会)と呼ばれる Parish があり、さらにその下位に Chaplaincy がある。

<sup>3</sup> 「フィリピンではクリスマスとともに、この聖週間が重要な年中行事。主イエスの受難と死、そしてその復活にまつわる物語を、教会のミサを中心に、受難の詩『パシオン』の

---

朗読やそれを演劇にした『セナクロ』などを通じて追体験する。また日頃に犯した罪を購うために裸足による巡礼やむち打ち苦行などに参加する住民も多い。聖金曜日が祝日に定められており、翌日の土曜日と復活祭の日曜日を併せて普通3連休となる。

各地の有名な行事としては、ブラカン州マロロスやリサール州カインタなどで上演される『セナクロ』劇。また聖金曜日にパンパンガ州サンフェルナンド町内の各村で行なわれる『十字架はりつけ苦行』。また傷付いたイエスと母マリアが再会する『スガット(傷)』や『パスルーボン(再会)』と呼ばれる宗教行列が東ネグロス州サンカルロス町などで行われる。

さらにマリンドゥーク島の主な町々の教会周辺を舞台にして繰り広げられるローマ兵士ロンヒヌスを主人公とした仮面劇『モリオネス』がある。いずれも住民自らが参加する。

これら伝統的な聖週間の行事に加え、最近では首都圏マニラ市のメンジョーラ橋を初め主な町や各スラム地域などで、政府に貧困層の抱える現在の『受難の生活』を訴えるため、イエスの刑場への道行きと十字架の張り付けを再現する『カルバリオ』と呼ばれる抵抗演劇もよく見られる。」（『まにら新聞』ウェブサイト「フィリピン歳時記 2003」<http://www.manila-shimbun.com/living/sajiki.htm>、2004年5月14日アクセス）

<sup>4</sup> 「conscientization」といい、ブラジルの教育学者、識字教育実践家パウロ・フレイレに定義され、広まった考え方。「フレイレは、『非能動意識』から『未熟な能動意識』を経て『批判的能動意識』に至る意識の発展の過程を『意識化』と呼んだ」（野元弘幸「パウロ・フレイレ教育論の研究（その1）—パウロ・フレイレ教育論の展開と特質—」『名古屋大学教育學部紀要—教育学科—第35巻』名古屋大学教育学部、1988年、198頁）

<sup>5</sup> BCC=Basic Christian Community（キリスト教基礎共同体）：中南米の解放の神学とともに起こった「共に祈り礼拝し、自分たちの状況を共に解決し、問題に直面した時には互いに支え合う自助自立のキリスト者のグループ」（フリオ・ラバイエン「民衆の叫び声」ルーベン・アビト、山田経三編『フィリピンの民衆と解放の神学』明石書店、1986年、62頁）である。バコロド教区では‘Preferential Option for the Poor’（New way of being church, Church of poor）として知られる。

<sup>6</sup> 2004年11月18日に Parish となった。

<sup>7</sup> ミサの前半、神の言葉を教える部分である「言葉の典礼」を信徒の礼拝奉仕によって行なう。神父がなかなか訪ねられない遠隔地でも信徒自ら行なえる「司祭のいないミサ」。現地の言葉（イロンゴ語）によって行なわれ、聖書の特定箇所を現実生活の中に文脈化（contextualize）して学び合うことが特徴。

<sup>8</sup> 多くの貧困層住民らが居住する海岸、河岸、ダンプサイトなどは、多くの場合政府所有地（時に富裕層の民有地）であるとされ、借地権、居住権が不明確なまま放置された住民は、しばしば「不法占拠者」として軍・警察などによって強制排除・立ち退きさせられる。

<sup>9</sup> 「都市貧困層」とは主観的な概念で、定義する主体によってその内容は大きく異なる。詳しくは、木場紗綾「マニラ首都圏の都市貧困層をめぐるポリティックス—『政治参加』と『政治利用』をめぐる外部者の言説と貧困層の主体性—」

（<http://www.46ch.net/~saging/MAThesis/body.pdf>、2005年2月20日アクセス）16～37頁を

---

参照。

<sup>10</sup> 2004年11月11日、Mrs. Josefina Bertol（通称 Nanay Pinang：カメロリ BCC、エリア・コーディネーター）に筆者がインタビュー。

<sup>11</sup> TALTALは「釘付け」の意で、キリストの磔刑を指す。

<sup>12</sup> 2004年11月12日、Mrs. Mary Jean S. Mecha（カメロリ BCC、文化グループ）に筆者がインタビュー。

<sup>13</sup> アイルランドの伝道者、聖コロンバヌスが設立した修道会。

<sup>14</sup> 1939年、アイルランド生まれ。1964年からバコロド教区で農業協同組合やBCCを作りあげ、1984年、「ネグロスの9人」事件で投獄され、マルコス大統領によって国外追放。1987年フィリピンに戻り、2004年4月病没。（ニアール・C・オブライエン著、大宰佐太郎・大河原晶子訳『涙の詩 希望の島』朝日新聞社、1991年）

<sup>15</sup> 同書、34～35頁。

<sup>16</sup> セブ島、パナイ島などからやってくる季節労働者。封建的荘園制の遺制を残す農園（アシエンダ）で、劣悪な労働条件の下で働いている。

<sup>17</sup> Fr. Romeo E. Empestan ‘BRIEF HISTORY OF THE CHURCH OF NEGROS’, Diocese of Bacolodo, May 2003, p. iii – p. v

<sup>18</sup> 1994年5月31日、Parishとなった。

<sup>19</sup> この経緯については、前掲（脚注1）拙稿を参照のこと。

<sup>20</sup> テレンス神父の秘書、Mrs. Jinky Seloterio の記録（毎年のカルバリヨ・パンフレットの説明文を本人が整理、書き足したもの）による。

<sup>21</sup> 2004年11月12日、Mr. Antoniet Guanzon（カメロリ初の住民 Nanay Ebing の孫、現バランガイ・キャプテン Mr. Raymundo Sapa の甥）に筆者がインタビュー。

<sup>22</sup> 2004年11月17日、Mrs. Eva Baterna（通称 Nanay Eva、ユボのBCC エリアリーダー）に筆者がインタビュー。

<sup>23</sup> 前出（脚注20）Mr. Guanzon インタビュー。

<sup>24</sup> 2004年11月14日、筆者がインタビュー。

<sup>25</sup> 2004年11月12日、筆者がインタビュー。

<sup>26</sup> 前出（脚注9）の人物。

<sup>27</sup> 前出（脚注21）のアントニエット氏、およびマヒナイ神父インタビューを総合。

<sup>28</sup> PC 関係については、栗田英幸「環境破壊に対抗する『グローバル・ネットワーク』とサブシステム— 鉦山史から見たグローバル・ネットワークの史的変遷とその可能性」郭洋春・戸崎純・横山正樹編『脱「開発」へのサブシステム論— 環境を平和学する！2』法律文化社、2004年、117頁、脚注5を参照。

<sup>29</sup> 2004年11月16日、筆者がインタビュー。

<sup>30</sup> 2004年11月16日、筆者がインタビュー。

<sup>31</sup> ラグランハにおけるバナナ生産の盛衰の経緯については、伊藤美幸「フィリピン・バナナ村の歩み」戸崎純・横山正樹編『環境を平和学する！— 「持続可能な開発」からサブシステム志向へ』法律文化社、2002年、153～162頁を参照。

<sup>32</sup> 2004年11月16日、筆者がインタビュー。

<sup>33</sup> BCC の活動の一つ。各地域で主に学齢前の子どもが通い、読み書きなどを学習する。

<sup>34</sup> 2004年11月16日、筆者がインタビュー。

---

<sup>35</sup> 2004年11月16日、筆者がインタビュー。

<sup>36</sup> 「2月革命以降、かつての活動家の多くは議会闘争に回帰したが、CPPをはじめとするNatDem（引用者注：CPP-NPAを支持するNational Democrats＝民族民主主義勢力）は武装闘争の継続を主張した。CPP内部では闘争の形態をめぐる対立が続いていた。党指導部に返り咲いていたシソン（引用者注：CPP創始者、ホセ・マリア・シソン）はこうした動きに懸念を示し、1991年、CPP結成当時の毛沢東路線を再認識すべきであるとの論文を発表して、党内の思想矯正運動を開始した。一方で、マニラ首都圏を中心としたマニラ・リサール支部は、革命には大衆の意識改革が必要であると考え、ゲリラ戦に依らない大衆運動や選挙活動の重要性を主張した。左派は決定的に分裂し、前者はRA（Reaffirmansists：再確認主義派）、後者はRJ（Rejectionists：修正主義派）と呼ばれるようになった。」前掲（脚注9）木場論文、8頁。

<sup>37</sup> Gonzaga, Violeta Lopez, 'Negros church Must Remain as Catalyst for Social Change', *Katilingban Vol. 5 No. 2, September 1991*, p. 7（筆者訳）

<sup>38</sup> 大橋成子「『70年代』—アジアのムラから見た《世界》⑩」『季刊ピープルズ・プラン28』ピープルズ・プラン研究所、2004年11月、160頁。

<sup>39</sup> 脚注1に同じ。

<sup>40</sup> 1581～1586年に行なわれた、カトリック司祭らによる「マニラ会議」でフィリピン群島に対するスペインの宗主権を正当化した。（ルーベン・アビト「カトリック教会と植民地支配—19世紀フィリピンの抵抗運動を視座において」ルーベン・アビト、山田経三編『フィリピンの民衆と解放の神学』、明石書店、1986年、15～17頁。）

<sup>41</sup> Iletto, Reynaldo Clemena, *PASYON AND REVOLUTION: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*, ATENEO DE MANILA UNIVERSITY PRESS, 1979, p. 1-27

<sup>42</sup> 前掲（脚注40）書、19～21頁。

<sup>43</sup> 前掲（脚注9）木場論文、5頁。

<sup>44</sup> 宮脇聡史「『キリスト教国フィリピン』の現代カトリック教会の社会観・社会参与—その教会観との関わり」『東京基督教大学紀要 キリストと世界 第13号』東京基督教大学、2003年3月、14～16頁。

<sup>45</sup> 同論文、15頁。

<sup>46</sup> 同論文、17頁。

<sup>47</sup> 同論文、18頁。

<sup>48</sup> イヴァン・イリッチ、パウロ・フレイレほか『対話—教育を超えて』野草社、1980年、19頁。

<sup>49</sup> たとえば、パウロ・フレイレ著、小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周訳『被抑圧者の教育学』亜紀書房、1979年、220～227頁、など。

<sup>50</sup> 同書、244頁。

<sup>51</sup> 菊池久一『<識字>の構造—思考を抑圧する文字文化』勁草書房、1995年、52～61頁、104頁など。

<sup>52</sup> 前掲（脚注49）書、218～219頁。

<sup>53</sup> 1968年のラテンアメリカ司教会議（メデジン会議）のメッセージ。（フィリップ・ベリマン著、後藤政子訳『解放の神学とラテンアメリカ』同文館、1989年、43頁）



---

## 参考文献

- アビト, ルーベン、山田経三共著『解放の神学が問いかけるもの—アジアの現実と日本の課題—』女子パウロ会、1985年。
- アビト, ルーベン、山田経三編『フィリピンの民衆と解放の神学』、明石書店、1986年。
- IMADR-MJP グアテマラプロジェクトチーム編『マヤ先住民族 自治と自決をめざすプロジェクト』、現代企画室、2003年。
- 井上澄夫『歩きつづけるという流儀』晶文社、1982年。
- イリイチ, I、フレイレ, P『対話—教育を超えて』野草社、1980年。
- 宇田進編『新キリスト教辞典』、いのちのことば社、1991年。
- 大橋成子「『70年代』—アジアのムラから見た《世界》⑩」『季刊ピープルズ・プラン 28』ピープルズ・プラン研究所、2004年11月、158～160頁。
- 尾関周二『[相補改訂版]言語的コミュニケーションと労働の弁証法—現代社会と人間の理解のために—』大月書店、2002年。
- オブライエン, ニアール・C 著、大窄佐太郎・大河原晶子訳『涙の島 希望の島』朝日新聞社、1991年。
- 郭洋春・戸崎純・横山正樹編『脱「開発」へのサブシステム論—環境を平和学する！2』法律文化社、2004年
- 菊池久一『<識字>の構造—思考を抑圧する文字文化』勁草書房、1995年。
- グティエレス, G 著、関望・山田経三訳『解放の神学』岩波書店、1985年。
- グティエレス, G、マタイス, A 編『国際シンポジウム 解放の神学』明石書店、1986年。
- 栗原彬『管理社会と民衆理性—日常意識の政治社会学—』新曜社、1982年。
- 戸崎純・横山正樹編『環境を平和学する！—「持続可能な開発」からサブシステム志向へ』法律文化社、2002年
- 鍋倉健悦『人間行動としてのコミュニケーション』思索社、1987年。
- ノーバーク=ホッジ, ヘレナ著、『懐かしい未来』翻訳委員会訳、『ラダック 懐かしい未来』山と溪谷社、2003年。
- 花崎皋平『[増補]アイデンティティと共生の哲学』平凡社、2001年。

- 
- ハーバーマス、ユルゲン著、細谷貞雄訳『公共性の構造転換』未来社、1973年。
- ハーバーマス、ユルゲン著、河上倫逸・M.フーブリティ・平井俊彦訳『コミュニケーション的行為の理論（上）』未来社、1985年。
- ハーバーマス、ユルゲン著、藤沢賢一郎・岩倉正博・徳永恂・平野嘉彦・山口節郎訳『コミュニケーション的行為の理論（中）』未来社、1986年。
- ハーバーマス、ユルゲン著、丸山高司・丸山徳次・厚東洋輔・森田敦実・馬場孚瑳江・脇圭平訳『コミュニケーション的行為の理論（下）』未来社、1987年。
- ピースボート99編『フィリピンはもっと変わる』第三書館、1986年。
- フレイレ、パウロ著、里見実・楠原彰・桧垣良子訳『伝達か対話か—関係変革の教育学』亜紀書房、1982年。
- フレイレ、パウロ著、小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周訳『被抑圧者の教育学』亜紀書房、1979年。
- フレイレ、パウロ著、柿沼秀雄訳、大沢俊郎補論『自由のための文化行動』亜紀書房、1984年。
- フレイレ、パウロ著、里見実訳『希望の教育学』太郎次郎社、2001年。
- ベリマン、フィリップ著、後藤政子訳『解放の神学とラテンアメリカ』同文館、1989年。
- ベリョー、W『フィリピンと米国—LIC 戦略の実験場』連合出版、1991年。
- ボアール、アウグスト『被抑圧者の演劇』晶文社、1984年。
- マクウェール、デニス著、山中正剛監訳『コミュニケーションの社会学』川島書店、1979年。
- 宮脇聡史「『キリスト教国フィリピン』の現代カトリック教会の社会観・社会参与—その教会観との関わり」『東京基督教大学紀要 キリストと世界 第13号』東京基督教大学、2003年3月、1～22頁。
- 山本宗補『ネグロス—嘆きの島』第三書館、1991年。
- 山本宗補『フィリピン 最底辺を生きる』岩波書店、2003年。
- 横山正樹「第三世界と先進工業諸国にわたる市民連帯は可能か」、久保田順編『市民連帯論としての第三世界』文眞堂、1993年。
- 横山正樹「市民連帯の意識化の方法としてのエクスポージャー論」『市民連帯論としての第三世界』文眞堂、1993年。

---

横山正樹『改訂新版 フィリピン援助と自力更生論～構造的暴力の克服～』明石書店、  
1994年。

ロジャーズ, E・M 著、宇野善康監訳『普及学入門』産業能率大学出版部、1981年。

渡辺英俊『解放の神学をたずねて』新教出版社、1988年。

Empestan, Romeo E., *BRIEF HISTORY OF THE CHURCH OF NEGROS*, Diocese of Bacolod,  
2003

Empestan, Romeo E., 'The Role of the BCC in the Third World', *Katilingban Vol. 5 No. 2*,  
September 1991

Empestan, Romeo E., 'Church of the Poor: Which Way?', *Katilingban Vol. 8 No. 1*, June-July  
1994

Fabros, Wilfred, *The Church and Its Social Involvement in the Philippines, 1930~1972*, ATENEO  
DE MANILA UNIVERSITY PRESS, 1988

Gonzaga, Violeta Lopez, 'Negros church Must Remain as Catalyst for Social Change',  
*Katilingban Vol. 5 No. 2*, September 1991

Ileto, Reynaldo Clemena, *PASYON AND REVOLUTION: Popular Movements in the Philippines,  
1840-1910*, ATENEO DE MANILA UNIVERSITY PRESS, 1979

McMullen, Vin, *Looking at the Philippines: through the eyes of the poor*, CAFOD, 1992

Youngblood, Robert L., *Marcos Against the Church: Economic Development and Political  
Repression in the Philippines*, Cornell University Press, 1991

木場紗綾「マニラ首都圏の都市貧困層をめぐるポリティックス—『政治参加』と『政治  
利用』をめぐる外部者の言説と貧困層の主体性—」同志社大学大学院法学研究科修  
士論文 (<http://www.46ch.net/~saging/MAThesis/thesis.html>、2005年2月20日アクセス)

平井 朗「脱開発コミュニケーション～西ネグロス州ラグランハにおけるカルバリヨを  
通して～」 ([http://home.att.ne.jp/wood/akira/hirai\\_ronbun\\_Philiken04.htm](http://home.att.ne.jp/wood/akira/hirai_ronbun_Philiken04.htm)、2005年2月  
20日アクセス)

『まにら新聞』ウェブサイト「フィリピン歳時記2003」  
(<http://www.manila-shimbun.com/living/saijiki.htm>、2004年5月14日アクセス)